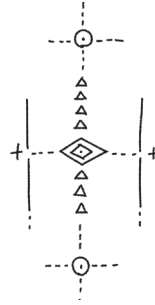


COSMOS集



同じ名のひとには申し訳ないが、一平に喝、この馬鹿野郎

かかしに託す

引間 三郎*埼玉

今日もまたセグロセキレイ枯草を納屋に運びて巢作りせわし
すれ違う女性の頬は朱にそまり浴衣の風が湯の香りする
鴉からつばめの雛を守らんとかかしに託す見張りの役を
白雲は二つにちぎれゆつくりと流れてはまたひとつになりぬ
裏の田の蛙の声が賑やかだ田植の日どり模索する夜

大野 英子選

「あすなる集」特選

老年 学習

渡 辺 繁*千葉

白 い 月

成 田 裕 子*青森

点呼待つごとく大きな紫を並べて庭のアイリスの花
亡き義父が愛でたアイリス涼やかな薄紫が広がる五月
まち針の玉ほど小さな幸せが入っているかすずらんの花
アイリスの上に乗つかる白い月ガラスのびんに入れておきたい
水たまりごとに小さな花筏、ピンク色濃き八重桜花

一 平 に 喝

長 瀬 慶一郎*福島

私の背をかすめるように飛ぶツバメ巢作り終えて子育てのころ
へディングでゴールを決めたあの選手抱き合いながらも顔が痛そう
いわきFCの田村監督立ち通し雨に負けない気合がひかる
クマよりも恐いニンゲン強盗が「カネ、カネ」といい老婆を縛る

春はもうむかしの様の春でなし夏日三日にわれ不調なり
春キヤベツ千切つては食むパリポリとうさぎとなりて食むは旨しよ
土手に咲く小花愛らしききら草「ジゴクノカマノフタ」とは哀れ
今日四月二十二日は「地球の日」天地に礼し散歩はじめる
抜け小路は袋小路の対語とは老年学習まだ果てしなし

すきな 薔薇

奥 呂美生 東京

我が家より徒歩十分の植物園「ちよつと行こうか」「今日も行こうか」
麦とろと蕎麦にみたされ目指し行く植物園の深大寺門
ノイバラの突然変異の小さき薔薇まことに小さき「シウノウスケバラ」
数々の薔薇の名きけど帰りにはこれは「ばら」ですあれも「ばら」です
すきな薔薇、源氏物語賢木での階はしのものとなるしめやかなさうび

福士 りか選

釘煮つまんで

藤田 邦彦*東京

桃咲いて鶯がきて鳴いていはいかなご釘煮きょうもまだこぬおてんとさんまだ出ているが到来の釘煮つまんで飲み始めたりいただいたいかご釘煮あとわずか一つつまんで姿眺める喧しく褒め合っている二人連れに「黙れ」と言えずまじい酒飲む酒のあて甘納豆がいいと言うバカな男につきあっている

フライング

宮 梓一*東京

外来が始まってない病院のスターバックス七時開店悠という文字の意味などまだ知らぬ子が十日ほどフライングするカーナビの言うことを聞く 今日くらい全部誰かに委ねていたい妻と子にまた会えるまで中三日、先発投手じゃないんだからさ哺乳瓶を回し続ける窓の外まだ光るのは土星だろうか

新潟 平野

金子 英子*新潟

若狭から京都に向かう鯖街道に今も居並ぶ鯖寿司の店蛙鳴き広がる田には水入りて夕焼け映す新潟平野海に日の沈むがごとく輝けり夕陽を映す広き田の水杭の影映す水面の穏やかなる福島潟に日の光さす田に水の入りて際立つ放棄地の緑の中に野菊が揺れる

立 夏 古寺 志津 新潟

一年の三分の一過ぎゆきぬ地震なみに始まる令和六年立夏の今日夏の気配は無けれども庭木は葉ごと陽光はじくセンサーで尾を振る小猫すまし顔しづかに見送る花咲く春を猫好きにあれど歳経としり生きものの最期は見取れず飼ふことならず姫うつぎ根分けて貰ひ来たりしは何時でありしか藤間昭子よ

命みなぎる

時田 泰子*静岡

雨粒をダイヤの如く散りばめてイロハもみじの新芽かがやく春雨のあと萌えいでし新緑に抑えきれない命みなぎる春キャベツと筍の Pasta 教わりて夕餉の厨のだんどり浮き浮き暖かき陽気をつれて春一番「起きよ！起きよ！」と雨戸を叩く咲きほこる枝垂桜の淡紅を滝の如くにライトが照らす

鈴木 竹志選

コロナ陽性

奥村 幹男*愛知

マスクして明るい声で看護師がコロナ陽性ですと告げ来る コロナより回復せし妻嗅覚を楽しませむと西瓜買いかぬ少しづつできる家事をば片付けるコロナの癒えて七十路我は消しゴムで消して消しクズ捨てること消すことかなわぬ記憶のありて今月はハガキ文通の返事来ず気がかりのままツツジは散りぬ

ワラビ摘み 高瀬和子 兵庫

草むらの木の根をへびと間違へてドキドキしつワラビを探す
草つかみ土手をのぼりて摘みしワラビさうだ姉にも送つてやらう
「いい色よ」少女がくれしプレセントまつ赤な口紅出して見るだけ
「みそ汁は煮干しの出汁が一番」と祖母のことが生きてる今も
こつそりと捨てられたのか笹原に戒名消えし墓石ふたつ

「やばい」 梶 薫子 鳥取

山沿ひに房を垂らしてお辞儀せり「ようこそようこそ」木五倍子は揺るる
あの色が好きだと母の言ふ目先うすむらさきの桐の花咲く
「やばい」とは何の事かと聞く母は昭和ひとけた新語は生れて
ときたまにおもひだしては話す母けふは田んぼの手順を喋る
大家族であつた昭和の厨には二升羽釜がおくどにおはす

赤 白 帽 畑 都*鳥取

蓮花田はピンク色したブルーなり赤白帽が見え隠れする
連休の青空を飛ぶジェット機にキャンセルをした船旅思う
吾の下手なクイックターンを思わせる水鳥の雛ばかりと顔出す
岸を目がけ投げる小石は川にさえ届かず蓬の群へと消える
夫の見たテレビの後の音量をまっすぐ上げて見る料理番組

支 ふる 木 樺 か 乃 広島

ずんずんと下枝切られてつぺんの木蓮の花は飛ぶやもしれぬ

春夏のくぎれ薄れて五月某日ノースリーブの娘とすれ違ふ
結局は独りと思ふ：柿の木に蛙一匹保護色となる

傍らにしかと支ふる木のあらば生き生き伸ぶるポトスもわれも
期待もちて裏切らるるを繰り返すさて桃太郎なるトマトを買はう

小田部 雅子選

椿 ロード 栢 弘子 山口

「老」病」のただ中にありこのありさま残しておかむみそひと文字に
わが試歩は椿ロードぞとりどりの花ふみて行く血の色もあり
今は昔戦のあとかと思ふほど赤き椿のちりばふてをり

九十年つみ重ね来し骨々がひとつひとつとくづるおもひす
宇野千代のタグあるパジャマ日々に着て紫色の夢も見むかな

野 苺 赤 西 森 恭子 高知

丁寧に毛玉をとりて着慣れたるセーター仕舞ふあすを信じて
新茶摘む指の感触こころよく峡の瀬音の小さくとどく

茶摘みなど習ひし姑も姉も亡し野苺赤き山里の庭

田に水が張られたるらし遠くより多数の蛙の鳴き声きこゆ
スリッパを脱げば両足軽くなり小鳥の声に窓開けてきく

ざわつきはじめ 尾 花 照子*福岡

春の日の矢部川沿いに歌いつつはなはなはなと風のなのはな
掘割にオカリナの音はふさわたり花陰の鳩めつむりている

ゆうぐれの春の時雨にうち濡るるスクールゾーンのポケモンカード
森のおく分割卵の春月をおけば世界はざわつきはじむ
春の日の集積場のマネキンは鳥たちさえた空へ手を伸ばす

ほやほやの 鶴田竹一 長崎

亡き妻のバッグに潜む老眼鏡をかければ世間びつたりと見ゆ
初めてのひとり花見の庭先で妻思ひつつ缶ビール開く
ほやほやの孤老の俺に友ら来て配食弁当勧めくれたり
「鍛振れる田畑の有りて幸せね」護りの辛さ君は知らない



影山 一男選

「その二集」特選

ねぎぼうず くだう れいん*岩手

ポストどこですかと尋ねられここはポスト少なきわれのふるさと
封筒を青か黄色か迷うときそれは来世のくちはしの色
外灯に柳揺れば影揺れてこれじゃあわたり悪人みたい
あなたには花束にない花ばかり教えたくなる あ、ねぎぼうず
たまねぎを三つ抱えたまま会ってそれを黙ったままで別れた

カラスらは人を覚えて悪さするらしきと聞きて程々に攻む

小さきものの声 福重 いく子*宮崎

ベッドから遠くを見ていた夭折の叔父のつつじが今年も咲きぬ
叔父の身の湯灌にしろく祖母の手は「嫁もとらずに」とその身を撫でき
かなしみは悟られぬよう父母に、くちなしだけがじっと見ていた
水俣の苦難三分に押し込まれこぼれゆくばかり小さきものの声
三分でわが水俣を語れるや「痛い痛い」とかあちゃん浮かべば

錆びた自転車 水鳥葉子 茨城

掘りたての筍が抱くあをさ香はぎゆつと巻かれし竹林の風
揚げひばり鳴く声ひびく虚空を錆びた自転車見上げてをりぬ
晩春の眠たき午後はびとびととおたまじやくしの脛る音あり
舗道に黒き泥土落としつつ夕陽の中をゆくトラクター
温水の池で飛び退くザリガニは土けむりして銕を隠す

鍋の焦げ癖 谷 真樹*神奈川

つけられた名前など知るよしもなく皐月にも咲くクリスマスローズ

貸した歌集と借りた詩集がそのまま気づけばいつしか疎遠になつた
うわあここに貼りつく最中の皮のようへあなたのためを思つて言うの
嫌悪とは一度でもつくつとやつかいで何度でもつく鍋の焦げ癖
怒りつつ風にあらがい坂道をのほつた先に沈丁花さく

二本足で立つ

新 美 亜希子* 神奈川

チキンカツは季節も場所も選ばずに食べたいときに食べていいです
モニターとスマートフォンとディスプレイ首の後ろとつながつて見る
ねつとふりつくす見るの、ずーつと見ちゃうのと笑つた人がお休みしている
椅子の上で自由でありたい われ思う診察室の歯の総数を
草いちごぼちりぼちりと噛みつぶし 古墳の上に二本足で立つ

シーザーと

松 本 遊* 東京

山里の駅のベンチで日なたほこ鶯を聞く浴びるほど大きく
吊橋を渡り五月の風に逢う青く澄みゆく谷川の水
大吟醸の香りをかけば山里の青田を渡る風ふきぬける
干いちじくはシルクロードを渡りきてジュリアスシーザーと今宵一献
過去という美しきもの手毬唄つきつつ人は老いてゆくなり

水上 芙季選

同じ角度

小笠原 麻 美* 新潟

日暮ればスマホライトで道照らす消滅可能性都市なりここは
朽ちず立つ夫の生家の庭先の枝垂れ桜よ若葉かがやく

公開の立合い稽古土を踏み体組む音に清められたり
帰郷して能楽堂に母と並び同じ角度で「巻網」を観る
山姥の語り「空蟬の唐ころも」移住者われのこころに響く

まるぼちや

権 田 陽 子 静岡

しづやしづ俯きて咲く苧環（まきわら）の内よりきこゆる亡き母の声
切る切ると言はれ続ける柿の木は逃げるが勝ちと夏空めざす
カタカナ語辞典を引く手が追ひつかぬ大和ことばは絶滅危惧種
京焼の十三センチのまるぼちやの童武者なり頼もしげなり
生まれつき方向音痴の我なれば路地見るたびに呑み込まれゆく

斜めが揃う

小 田 沙也加* 愛知

迷子にはなれない朝だマスク越しの知らない街の下水のにおい
就職か博士か訊かれてばかりいて最近と言霊のこと考える
学会の予定を書き入れたときに斜めが揃う手帳のオセロ
蝙蝠の狂犬病の話から止まったままの生徒の右手
体育も部活も嫌いだつた日々ラケットが代弁者の顔して

一人 静

鏡 康 男* 三重

洋風の家のミモザに時雨きて花穂を濡らし過ぎてゆきたり
ピカピカとおしゃれな雨をまといたるミモザの花に夕陽とどきぬ
まじまじと一人静を見詰めおり静御前の舞うを想いて

天袋に閉じ込めおいた掛け軸の虎をゆるりと床の間に放つ
朝の五時障子明かりに床の間の跳ね尾の虎が目覚めたる夏

君が空から 由比玲子*大阪

口ザリオ 川村りら*鳥取

雨の降る路地裏に立つ仏像は眠そう春は深まりてゆく
タンタンのおらぬバンダ舎その上に変わらず春の空は広がる
おぼろ夜に見るが正しき花見らしあなたと二人気が遠くなる
近付いてくる足音のせぬまにいつまでも待つ桃の園にて
もうおらぬ君が空から降りてくるはずもないのに 春の空港

松尾 祥子選

郷土力士 池川紀江 愛媛

律儀なる羽根 八木 かおり 奈良

ペランダにイソヒヨドリヒヨドリの帰り来て去年より早い春の訪れ
花びらをフロントガラスに乗せたまま宮跡みやとこ通りを真つ直く走る
食み跡のある春キャベツ洗ひつつ思ふ絵本の『はらぺこあおむし』
ヤマトさん、生協さんにダスキンさん 母はいつでもさん付けで呼ぶ
朝は東夕は西へと陽に向かひ飛ぶ鴉カラスらの律儀なる羽根

助手席 池田花穂*福岡

黄色を思う 山添 聖子*奈良

つる先を伸ばしてスイートピー揺れる手をつなぎたい幼子のごと
しゃぼん玉吹き合うようなおしゃべりをしている中学二年生たち
右上にマル秘と印字された書類しめやかに書く新学期の夜
菜の花とたんぽぽ、ミモザ、土佐水木 不安なときは黄色を思う
もし今日の疲れを可視化したならばもう替え時の歯ブラシくらい

怠りを嘲るごとく頬を打つカラスノエンドウ種を飛ばして
羊蹄きしとや泡立草を籠に摘み小さき花を愛でる一日
植生を知らぬ夫の草刈りに絶えてしまぬ赤いガーベラ
姑も母も西へと旅立ちて庭の紫蘭をひとり眺める
手の甲に冷やき雫の連なりて濁る私を澄ます口ザリオ

ニュースにて知る罪人つみびとも良き名なり名付けし親の心根思ふ
穿き馴るるズボンの裾を六センチ上げ体操にゆく木曜日
夕方町の町内放送に耳澄ます行方不明の人有りと言ふ
向かひ家の散髪屋さんは姉御肌年下なれど頼りある吾
十両に風賢かぜけんは昇進す郷土力士にことさら華やぐ

傘引きずる音で私の後ろには君がいることを知る退勤時
君と喋って笑いあつて楽しくてそれでも映画に誘えなかつた
駐車場までの道のりが短くてもっと君と話したいのに
休日きゅうじつはドライブをすつと言う君の助手席にいつか座つてみたいな
君と話せたことが凄く嬉しくて桜のマウントレニアを買ふ